研究紹介「光があれば影もある」

国際日本学部　国際文化交流学科　島川　崇

２０２０年４月に着任した島川崇です。私は観光学を研究しています。観光学は複合的な学問領域であるということが言われています。観光学の世界的潮流を概観すると、米国のホテル経営学を中心とする流れと、欧州の社会学や開発学を中心とする流れの大きく２つの流れがあります。我が国では、この大きな２つの流れに加え、建築学・都市計画、文化人類学からの研究が進んでいます。また、観光関連産業出身の研究者による産業論的な研究の占める割合も大きいです。

ただ、総合的な学問であるということを言い訳に、研究者は自分の専門分野のたこつぼ内から出てくることなく、他分野には無関心である場合が少なくありません。さらに、研究内容もそれぞれの研究分野における観光のケーススタディといった色合いの研究も多く、学問として観光学がいつまでたっても一人前として扱われる域に達していないと言っても過言ではありません。総合的学問、学際的学問という言葉に甘んじることなく、もっと観光の多様な側面にも関心を持っていかなければならないと強く感じています。

これまで、観光は経済効果の面から語られることが多く、国の戦略において重要視され始めたのも、その経済効果に着目されたことが大きいのですが、私は、神大が観光を人文学的側面に注目しているところに大いなる関心を持って参りました。人文学が追求するのは、人間とは何か、そして自由とは何かです。リベラルアーツの言葉が示しているように、まさに自由を求める学芸であり、観光はまさに自由を体現した活動です。現在の日本の観光政策や観光研究は、あまりに経済的側面ばかりが強調されすぎて、観光の本質が今見失われつつあるように思います。ここで、根本に立ち返り、人はなぜ旅をするのかということを人文学から解き明かしていくことを神大ではチャレンジしていきたいと考えています。

私は、２００５年より大学教員のキャリアを仙台の東北福祉大学からスタートしました。２００９年に東洋大学に移ったのですが、その後の２０１１年に東日本大震災が東北全域を襲いました。私が住んでいた家も半壊で瓦が全部落ちてしまったそうです。当時の仲間も多く被災しました。命からがら生き延びた彼らと電話で話をすると、被災地に来て欲しいと言うのです。まだ津波の惨劇が生々しい４月に石巻を訪れました。来てくれるだけで嬉しい、言葉を交わすだけで力になると言ってくれました。被災地から遠くに住む者としては、被災者が大変なときに浮かれてはいけないと、自粛ムードが広がっていました。でも、自粛することよりも、現地を訪れることで、まだまだインフラが整わない中での経済を回すことができるようになり、それよりも何よりも、被災者の力になるということを実感したので、休みになると、ボランティアをしに被災地を訪れました。かいてもかいても減らない泥、終わりが見えない活動をしていく中で、初めて研究者魂に火がつきました。（それまでの私は、実務家教員だということを言い訳に、研究なんかそっちのけで、年度末にはテキトーにそれらしい研究報告を出していただけでした。）今まで観光には力があるなんて言っていたけど、こういう未曾有の危機の際に力を発揮できないのであれば、それは本物ではない。今こそ観光の効果を正しく伝えるために、研究者として被災地観光の効果を研究しよう、そう決意しました。

被災地の中でも、観光客を受け入れることに対しては意見が二分されていました。「俺たちは見せ物じゃねえ」「震災を食い物にするのか」そう言った言葉もよく耳にしました。しかし、私が行った調査の結果、観光客と会ったり会話したりしたことがある人は、観光に対して否定的な感情を抱く割合が劇的に下がるのです。また、一般的には、観光は団体旅行よりも個人旅行の

方が成熟しているということがよく言われることですが、被災地観光においては、個人旅行参加者よりも、団体旅行参加者の方が、被災者への感情の共有がなされ、また被災地を訪問したいと思う度合いが高いことも明らかになりました。その要因としては、個人旅行では、風景として、酷い状況の被災の惨禍を見るという行動をとるのと比較して、団体旅行では、被災の惨禍を見る前後に被災者の人がガイドとして当時の状況を語ってくれる機会に恵まれていることにあるということが分かりました。ガイドの存在があれば、多くの人が亡くなった震災遺構の前でピースサインをしながら自撮りする観光客はいません。

被災地の人々とも心の交流ができて、復興を見据えた観光のアドバイスもするようになりました。宮古市の浄土ヶ浜の遊覧船のガイドさんが、私の講演を聞いて、「私たちはそれまで、震災がなかったかのように美しい浄土ヶ浜の案内をしていましたが、私たちも震災のことを語ってもいいんだということに決心がつきました。」と言われたことが印象的です。

図-1　たろう観光ホテルを訪問したゼミ生たち

ゼミ生も連れて行きました。津波が3階まで直撃し、下層は鉄筋剥き出しとなって残った「たろう観光ホテル」は、早い段階から社長がこれは後世まで残さないといけないとの固い決意を持っていたことから、津波遺構として保存されています。社長は震災当時最上階から津波の襲来を決死の思いで動画に撮影しました。その動画をゼミ生と一緒にそのまさに社長が撮影した部屋で見るのです。学生の目に涙が溢れます。

観光という言葉は、中国古典「易経」の一節「観国之光、利用賓于王。（国の光を見る、用て王に賓たるに利ろし）」に由来しています。国の光を見るというけれど、光があれば、必ず影がある。光り輝くものばかり注目するのではなく、その影にあるものにも思いを馳せ、哀しみを共有することができるのも、観光のあるべき姿なのではないだろうか、私はそう考えるようになり、自然災害の被災地の復興を支援する観光だけでなく、事故の教訓を次世代まで伝え、風化させない取り組みや、今に残る戦跡から平和について考える取り組みにも関わるようになりました。特に、パラオの戦跡の保存に関しては、観光と絡めて効果的な枠組みが構築できつつありました。それが、コロナ禍で、パラオは感染者を一人も出していないにも関わらず、外国人観光客が来なくなったことで、一気にパラオの観光業界は干上がってしまいました。私のゼミ生も卒業後パラオの現地旅行会社で人気ガイドとして働いていましたが、帰国せざるを得なくなってしまいました。コロナが収束したら、私はすぐまたパラオの観光振興にも取り組みたいと思っています。やるべきことは山積みです。光だけでなく影も、喜びだけでなく悲しみも直視し、心を共有する旅をこれからも追求していきたいと考えています。

図-2　パラオに現存する日本海軍航空隊司令部跡